

靴音を鳴らしながらチームを組んだ2人の看守の夜間の巡回が始まったが、そこでこの男はどんな行動を？

そう思っていると、映画とは何とも便利な芸術で、時代は一気に12年前に遡り、信州第二刑務所に移送されてくる本作の主人公鈴木雅之（板尾創路）が登場する。彼は既に拘留所を2度も脱走したことがある曰く付きの囚人。そんな鈴木を注意深く観察しているのは看守長の金村（國村準）、他方、鈴木の身体検査をする看守は鈴木に対して「ここは拘留所とは違わず、刑務所だぞ、脱獄などできっこないぞ」と毒づいたが・・・。

この時代が昭和初期であることは、映画の後半登場する司法省のトップ上羅（石坂浩二）が「時勢厳しい中・・・」と強調していることからわかる。しかし、昭和初期の日本に子供たちのヒーローになったこんな脱獄王がホントにいたの？いやいやそれは真っ赤なウソ。本作は実話ではなく、板尾創路による完全なつくりものなのだ。

なぜ脱獄するの？そしてなぜ捕まるの？

脱獄と一言でいうが、実際にそれを実行するのは至難のワザ。もっとも、本作では鈴木のように類まれなる身体能力を持っていることを前提としてだが、実際に脱獄のテクニックをリアルに見せてくれるから、それは大いに参考(?)になる。しかし、この映画を最後まで観ても結局明らかにならないのは、手錠の外し方。看守をあざ笑うかのように何度も何度も手錠を外す鈴木だが、一体それはどうやって？

彼は、殺人や強盗などの凶悪犯罪を犯したわけではないから、有罪となって投獄されてもしばらく我慢すれば天下晴れての出所となるはずだから、彼はなぜ脱獄するの？彼の罪がだんだん重くなっていくのは脱獄をくり返すことによってであることが明らかになると、そんなにまでして鈴木はなぜ脱獄しなければならぬの？という疑問が大きくなってくる。そしてそれに続く第2の疑問は、あれほど知恵の限りを尽くして脱獄をするのに、なぜその後の逃走方法くらいきっちり考えていないの？ということ。彼は線路を逃走中にいつも取り押さえられてしまうのだが、そりゃ一体なぜ？脱獄をくり返すたびに鈴木には刑務所からの厳しい責めが待っているのだから、こんな痛い思いをしてまで看守や刑務所そして国家権力そのものを愚弄・挑発しなくてもいいのでは？本作を観ている観客は、みんなそう思うはずだ。一体彼は、なぜ脱獄するの？そして、なぜ捕まるの？

「脱獄モノは面白い」の伝統をきっちり！

「脱獄モノ」と聞いてすぐに思い浮かぶのは、スティーブ・マックィーンやジェームズ・ガーナーらが共演した『大脱走』（63年）ありゃ面白かった。その10年後、再びスティーブ・マックィーンが本格的な「脱獄モノ」に挑戦したのが『パピヨン』（73年）だが、これも感動的な名作だった。

「潜水艦モノが面白い」のは、ヴォルフガング・ペーターゼン監督の『U・ボート』（81年）以降今日までずっと続いている伝統。それは、第1に駆逐艦と戦う極限状況の戦闘シーンがシリアスになるため、第2に、狭い密室空間内であるため必然的に濃密な人間関係が形成され、人間描写がシリアスになるためだ。脱獄モノが面白いのもそれと同じで、

第1に監獄の施設や看守らとの知恵比べ、第2に脱獄犯の知恵と工夫そして卓抜した身体能力が面白いわけだ。

他方、脱獄モノの主演である脱獄犯を演ずるのは、ある意味大変だが、ある意味易しいかもしれない。それは、脱獄犯にはセリフがほとんど必要ないためだ。本作でも板尾創路演ずる主人公鈴木雅之のセリフはほとんどゼロで、顔の表情だけの演技に終始している。そんな「静の演技」に対する「動の演技」も、看守たちから殴られ蹴られるだけだから、ある意味で楽？映画初主演の板尾創路がそんな鈴木雅之役をきっちりとなし、かつ初監督作品で「脱獄モノは面白い」という伝統をきっちり守ったのは、立派なものだ。



板尾創路の脱獄王

2010年1月16日(土) 梅田ブルク7、なんばパークスシネマ、MOVIX 京都、三宮シネフェニックスほか全国ロードショー
製作：吉本興業・角川映画 配給：角川映画
©2009「板尾創路の脱獄王」製作委員会

少しなら、オチがあってもオーケー？

私は松本人志監督の『大日本人』(07年)を観て失望し(『シネマルーム15』410頁参照)彼の第2作『しんぼる』(09年)は全然観る気にもならなかった。それは第1に、彼のやっていることがあまりにも独りよがりて突飛だと思えるから。そして第2に、暗にそれをやれることが才能だ、それが芸術だと主張しているように見受けられるから。それと同じように、私は北野武映画もあまり好きではない。

そんな私には、脱獄をくり返して懲罰を受け、一人吊るされている鈴木雅之が映画中盤にみせる「あるシーン」にビックリ。それまで普通に喋っていたのに、なぜ急に歌いだすの？それがミュージカル映画の嫌いな人の理屈だが、そう言われりゃ確かにそう。また、昔は部分的に絵天然色になる映画があったし、成人映画では急にある部分がボカされたり黒点で隠されたりすることがあるが、これも映画の世界だけで通用する変なもの。そう考えると、本作中盤にみるあっと驚く「あるシーン」には当然賛否両論があるが、私にはその程度なら許容範囲内？

また、落語ではオチが生命線だが、映画だってオチが必要だと考える人には本作がラストに設定したオチは面白いかもしれない。本作には落語家の笑福亭松之助が特別出演しているが、彼はどこでどんな役で登場？鈴木はなぜ脱獄をくり返すの？そしてなぜ捕まるの？という疑問と併せて考えれば、これくらいのオチはあってもオーケーかも？

2009(平成21)年11月25日記